

志保之利
三篇土

1曾5
508
41

5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4 5





古事記三卷之十一

徵書記 正徵和尚字清岩招月庵ト
号セシホ福寺院太記モ 近代の於トシナヒテ世に

アリルタシタ多一長祐二年五月九日寂モ七十九尔遺稿を

草根集と名づケ一系福圓鑑吉考序印書稿ノ朝

野薫苑高名集成見シニ新續古今彙撰者雅世大納

言井鳥堺孝淳致阿人と徵書記の才と妙志一て後承

キと集にアレテアリトソリ凡事才を叶フム多矣

セシホ福寺院太印

○心致傳承前院ハ文明七年己卯十月宿モ

○或曰我信十一月丙午太師譜の紅粥を啜ヘ今り多

一歲と拂と是何の粥モ予同あれ多季の粥を漫遊

太師主の御歎王混ウツシキ一ノ室称極タマヒキ多に陸放翁が作る解
に家賣アラシ輕過カツカツ節身老怪レーハイ傍ハラフ年注云鄉信弱カミツク嘔カミツク至般
昂添カツカツ一扇是成ハセキへ立スルト

○尾澤國ハツザケ天カ音語オノゴ山余ヤマナカニの裔國造ヨリクニとぞれり故には神の
御カミまちう。此店の神社カミマチ三河ミツカをも勝ハシマのいた度カミツク志
麻マ治余マジナカニの後裔國造ヨリクニとぞれり信ヒツクく波神ハタケカミの屬スル
や居ハシマの神社カミマチある。

尾張國造 小止與余 コトヨ

尾張氏社千寧上神社
信よ浦を文のまとむ

三河國造 知波夜余 コトヨ

物部氏

遠江國造

印岐美余

物部氏

駿河國造 トヨ 斧堅石余 コトヨ

物部氏

二

○尾澤氏ハツザケとね井ハシマと見ゆの神カミもろ祀ハシマ燒ヤハシマ速日ヒツクニ也
あれハ尾澤三河ハツザケミツカあ又ハシマや貫ハシマ内ハシマね波ハシマ氏ハシマありハシマへ芳ハシマ吹ハシマ玉ハシマ造
の支流ハシマなり

○三河國ミツカ祐名ヒナ波ハシマ室候ハシマ教ハシマ免ハシマ里ハシマ神社カミマチハ玉ハシマ造ハシマ本ハシマ祭ハシマよ梅ハシマの
今ハ宝飯郡
昔ハモト林小造ハシマハ生ハシマに佐ハシマ免ハシマ工ハシマ里ハシマ庄ハシマと云ハシマこ多ハシマ足ハシマと云ハシマは
文字ハシマと贈ハシマして書ハシマくあれハラソコト稱ハシマモつまハシマと今ウ
タリハシマノ神社カミマチと呼ハシマ竹ハシマ

○ウカミハシマハタト様ハシマ音通ハシマニトワト又ハシマ通ハシマきハシマ、若ハシマとタリ
ト達ハシマよ似ハシマすハシマぬハラタリハシマハウカミハシマノ音ハシマほハシマるハシマや
○或問ハシマみ參ハシマに次ハシマて東海ハシマと并ハシマニハシマ、若ハシマのまことに仔
笑ハシマうハシマおハシマ、若ハシマも是ハシマろ和ハシマの東ハシマうハシマ、父ハシマのひ事ハシマとハシマ也

山城と才一とおつて年何時よりと申曰續日本紀云承
和三年十月承前之劄參内國次以才和國處之才一
初宜據新式改之以山城國處之才一云云九八平乃城
遷都の後_{三年}近_十に十三年仁明天皇の勅定ある年戊
亥

○三河國內神明名帳

八幡三所大菩薩大明神

若宮兩所天滿天神

正一位砥鹿大菩薩大明神

十九所

正一位鯉鮒大明神

座碧海郡

座賀茂郡

座八名郡

座嘴豆郡

座宝飯郡

座設樂郡

座宝飯郡

座宝飯郡

座額田郡

座渥美郡

座室飯郡

正一位猿投大明神

正一位石巻大明神

正一位羽刊大明神

正二位赤孫大明神

正三位磐倉大明神

正三位津守大明神

正三位兔足大明神

正三位白鳥大明神

正三位謂磐大明神

正三位阿志大明神

正三位御津大明神

正三位破神大明神

座宝飯郡

正三位内母トカニモチ大明神

座幡豆郡

正三位伊良子イラコ大明神

座渥美郡

従三位石山大明神

座碧海郡

従三位寅之大明神

座渥美郡

従三位猿投三御子大明神

座宝飯郡

明神二十二所

正四位下伊麻留明神

座碧海郡

正四位下糟月明神

座碧海郡

正四位下大伴明神

座八名郡

正四位下井祭明神

座宝飯郡

正四位下野社明神

座碧海郡

従四位下草部明神

座宝飯郡

従四位上犬頭明神

座碧海郡

従四位上和父知明神

座宝飯郡

従四位上白鳥三御子明神

座宝飯郡

従四位下日長明神

座碧海郡

従四位下大藏明神

座宝飯郡

従四位下熊来明神

座幡豆郡

従四位下齊宮明神

座幡豆郡

從四位下凍明神

コホリ

從四位下形原明神

コモリ

從四位下須羽南宮明神

座宝飯郡

從四位下律投明神

座設樂郡

從四位下亨加御玉明神

座幡豆郡

從四位下土完明神

座設樂郡

從四位下破鹿三御子明神

座寶飯郡

天神百十五所

座寶飯郡

正五位下鷦取天神

座碧海郡

正五位下小嶋天神

座碧海郡

正五位下伊保天神

座加茂郡

正五位下灰實天神

座加茂郡

正五位下野見天神

座加茂郡

正五位下兵主天神

座加茂郡

正五位下廣沢天神

座加茂郡

正五位下稻前天神

座額田郡

正五位下八怡天神

座額田郡

正五位下大庭天神

座宝飯郡

正五位下長孫天神

座八名郡

正五位下廣月天神

座渥美郡

正五位下廣鏡天神

正五位下石前天神

正五位下和知天神

正五位下大坂天神

正五位下柄山天神

正五位下揭本天神

正五位下小山天神

正五位下大井天神

正五位下石村天神

正五位下大村天神

正五位下江原天神

座渥美郡

座渥美郡

座渥美郡

座八名郡

座碧海郡

座碧海郡

座碧海郡

座碧海郡

座碧海郡

座碧海郡

座宝飯郡

座碧海郡

座碧海郡

座碧海郡

座宝飯郡

座碧海郡

座碧海郡

座設樂郡

座設樂郡

座設樂郡

正五位下野邊天神

正五位下國玉天神

正五位下服織天神

正五位下古部天神

正五位下磯泊天神

正五位下國玉天神

正五位下久佐志天神

正五位下野邊天神

正五位下葛間天神

座渥美郡

正五位下磯部天神

座宝飯郡

正五位下蘿羨天神

座幡豆郡

正五位下走升天神

座幡豆郡

正五位下柱津天神

座額田郡

正五位下小山田天神

座室飯郡

從五位上河西天神

座八名郡

從五位上和田天神

座八名郡

從五位上野屋天神

座碧海郡

從五位上酒人天神

座渥美郡

從五位上火御子天神

座渥美郡

從五位上比蘇天神

座碧海郡

從五位上佐井天神

座八名郡

從五位上蒜生天神

座八名郡

從五位上加知天神

座寶飯郡

從五位上完秦天神

座額田郡

從五位上島田天神

座設樂郡

從五位上竹谷天神

座寶飯郡

從五位上梶井天神

座八名郡

從五位上舟多天神

座渥美郡

従五位上溫谷天神

座宝飯郡

従五位上土師天神

座宝飯郡

従五位上小河天神

座碧海郡

従五位上草佐天神

座幡豆郡

従五位上日女天神

座八名郡

従五位上伊智驗天神

座碧海郡

従五位上酒井天神

座碧海郡

従五位上於神天神

座八名郡

従五位上岸天神

座碧海郡

従五位上并栗天神

座碧海郡

従五位上酒井天神

座碧海郡

従五位上小田天神

座宝飯郡

従五位上小楢天神

座八名郡

従五位上摩芋辛虞天神

座碧海郡

従五位上竹生天神

座宝飯郡

従五位上黑田天神

座宝飯郡

従五位上庭野天神

座宝飯郡

従五位上大津天神

座八名郡

従五位上湧波天神

座設樂郡

従五位上石梅若御子天神

座設樂郡

従五位上劍若御子天神

座設樂郡

従五位上大社天神

座八名郡

従五位上神小山天神

座八名郡

従五位上大歲天神

座渥美郡

従五位上神本天神

座宝飯郡

従五位上池上天神

座宝飯郡

従五位上御宗天神

座宝飯郡

従五位上八劔天神

座宝飯郡

従五位上国津天神

座八名郡

従五位上厚木天神

座宝飯郡

従五位上出雲天神

座宝飯郡

従五位上石上天神

座宝飯郡

従五位上牟留天神

座渥美郡

従五位上挿木天神

座渥美郡

従五位上解天神

座宝飯郡

従五位上伊久佐男天神

座渥美郡

従五位上伊久佐女天神

座宝飯郡

従五位上多義河津天神

座宝飯郡

従五位上楓村天神

座宝飯郡

従五位上菱木天神

座宝飯郡

従五位下絹束天神

座八名郡

従五位下黒楊天神

座宝飯郡

従五位下善德天神

座宝飯郡

従五位下櫻井天神

座宝飯郡

従五位下三祭天神

座宝飯郡

従五位下元社天神

座宝飯郡

従五位下大歲天神

座宝飯郡

従五位下溝庭天神

座宝飯郡

小初位神七所

今槐若御子

座宝飯郡

上羽神

座宝飯郡

御與本恭部若御子

座宝飯郡

御與神

座八名郡

磯宮神

座宝飯郡

高宮若御子

座額田郡

牟久津神

座額田郡

終

三列賀茂郡猿投大明神前

宝樹院周海書之

千貳元祿五年壬子中春吉奠

○甲午の二月羅蒙ハイモウにて日月光あつりより五月の比

肥前長崎港渡候たよ詮行ハシ比空病床に列リ死
至るとのせふ余に及ハ一六月度ニ達テ
乃ハトトホ夜未一時にりこれ足よ死するとのを
氣ヒトト申六月新假主附マツルヨクノ澤渡の事
若ハシ夢よ象南ヨコウナンもあくアカ壇タツの高タカか死スルおスル
アリアリまマハ經キョウとミ人形ヒトヅメと化ハシメリ夜ヨ入ルおスル
人金ヒン敷ハシメて度ハシメとミ人形ヒトヅメと化ハシメリ夜ヨ入ルおスル
ト室ヒムカある同トモニアカあアカ席シヤク下シタ中マサニえスルの所シテ病
に外ハシメし鷺サギ沼ハシメ菜ナ歌カトミすミ時ハシメアリアリそれとミ三
日ハシメてやうて活ハシメキアキ死スルそミのハサハサ行ハシメす努
白シロ隱ヒメニアカ諸ハシメ列ハシメ多ハシメ孤ハシメも同トモニアカ夜ヨは深ハシメすミハアカトミ

エミニアカ夜ヨ而ハシメとミ頬カク頬カクとミ

○荀皇都太学寮ヨウカウドタクク先聖センセイ之ノ師シ教カウジ力カウリ節カウセツ儻カウタウ像カウジヤウと
累カウリ二仲カウニの新カウシ立カウリてミ小カウコ一カウイ極カウカクハ延カウイ壽カウス式カウシ矣カウイ
見カウミ六十金カウキン列カウリの玉カウタマ多カウタタ也カウタタ若カウワカ春秋カウシウの禮カウリとミ
夫カウフ舊カウカウ世カウセに及カウシ太学カウタク終カウシウ玉カウタマ多カウタタ也カウタタ家カウカ居カウジハ若カウワカ
中カウチ鴻カウカウ羽カウヒ御カウゴ萩カウカウ園カウエン松カウカウ
林カウリ多カウタタ也カウタタ聖カウセイ尼利カウニリ學カウガク校カウコ外カウガイ孔カウコ堂カウドウとミ
主カウシ也カウタタ也カウタタ威カウカウ敬カウカウ公カウコ私カウシ禮カウリとミ一カウイ之カウノ東カウドウ
那カウナ村カウムラの宮カウノミコト代カウタタ也カウタタ成カウシ殿カウテンとミ建カウシ立カウリ也カウタタ二仲カウニの島カウシマも年カウニもカウタタ也カウタタ
常カウシタ憲カウケン賄カウカウ太相國カウタカウタカウタカウ神國カウシムカウ地カウジとミ以カウシ昌平坂カウシマヒンザンと号カウシハシ一カウイ新カウシよ

大成殿と再建あり。新うち檜梁と良木ミツリの延
きに犯川長瀬の吏、まかに聖位とりけ社主う
と富永七年彦宣作久間あ舞守平作翁宿よ皆
刹に西主事と名へれるふと下の神位を明経の
刹よりあるとある。また秋の祭あり。一月後
掌合と達て毎に書と海上も白井え成。掌の全
身もあり。活れを是と年代化あり。

○己亥春母祖國ふ文、而とヤシ麻子く蟠蛇去事
人以心うと猶人銃うてサセキニナビギノ
セケムとて。モジヘ首半ねり三月ナヒ持海リ
と見えりとて人没るる。山岸半、ぬく匂の小さねそ

面耳あり。頭小面も元もくと生ハヌトトカヤ

○天子御砂と御もと天御と云ハ後苑園院乃時どうの称
呼う。左ハ二年。右ハ一ノ

○教尼今室東乃支那寺隔合ひりせう。

○達別秋葉山

○大登山秋葉寺やうむ觀音五方院又曰小光明山
ハ大鏡山光明寺と号。日本ハ古堂院矣。世
有寺曹洞流の古禪刹う。秋葉寺ハ佐賀天
照御世に遙をせ。

○以前藝別大寺法空淨辨居士天節景顯又葉城主

○崇天院前戸部侍郎顯道義本居士天野遠幹

是も秋葉幸徳大檀越なり

法身表

弥陀種子



蓮華部

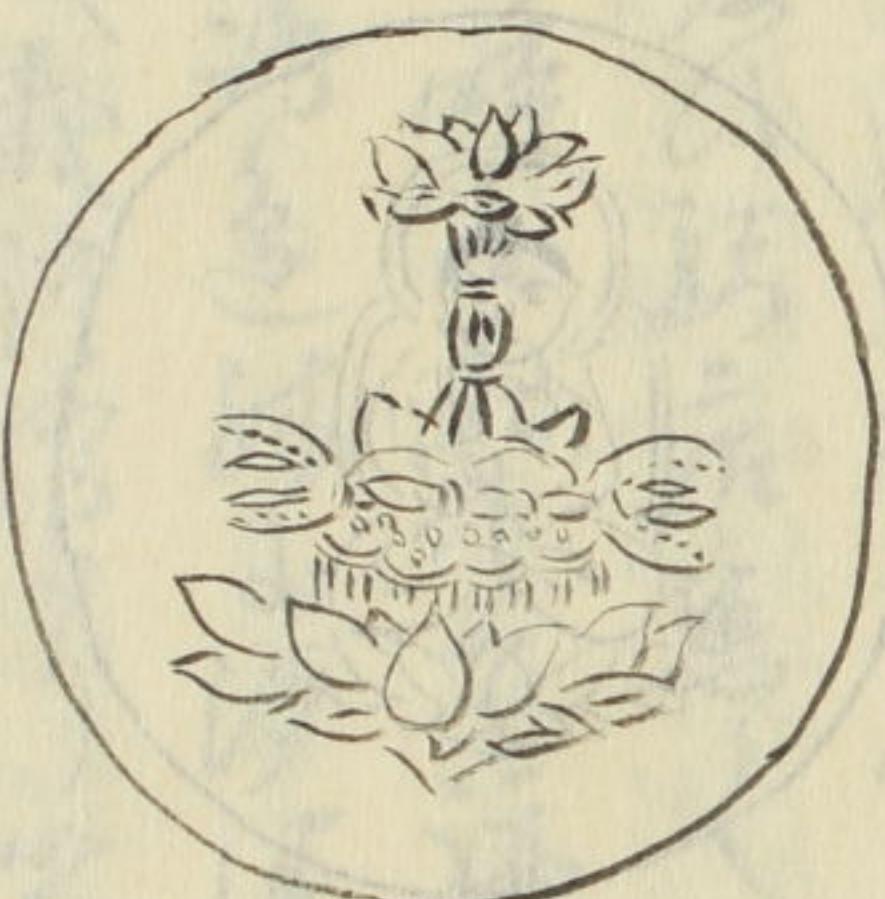
○彌陀全體の爲

やと御在へ

○えひの事と御在へ

高木也と御在へ

報身表



三昧耶形

金剛部

應身表

四身

自性身
變化身
受用身
等流身



佛陀部

三相形

○壬寅八月十四日乃夜泊の江より海を下り沙灘を出
て風雲うつ吹ひとうてきれああむかで車をくぐり
ゆくと暴風あざむけて波濤と水をもよけの方よ
りけ湯岸の近く泊り既に俄よ渡と渡さう櫛面
の船と被ま合ひ旅店萬々破れ倒ち漏船の男
女をめり乍夫人呼び死して海をす汲み出せば
そぞのうちうき死を沙ばく民家萬々漂
流を今宿のる（哉達也）第モヒシテあれ
南舟モ因ツツクの瀬の色を流れニ冬桜の多若
もありとくろぬねぬうち上田國今年豐よ登
きに沙よもぎもくろぬねぬと石庭

もあすれりと極なり 丙和元年辛酉七月廿日暴風
波浪の時よ魚かずの民衆ハ死没セリ 流れゆる
か一 今年二十里濱の處トナリ 南乃が大形村ニテ
里もしくは島の相模々漂死又百とばかりと云
立命館ハ三の二ありて是と同様にすまうと
に於てその傍邊より浪花と稱し 家と例モ半
隈ノル 高見宿新田尾南東川ノ村を金部田頭に移す。新田田
舎は故加川邊船宿下田村也。其の後凡十
九ヶ所移れ因てちくく浪花と呼ぶ。高見宿
も羽例モ名古屋ニ四連。己年八月八日大風の後也。
蓋風氣く強き破壊甚大ム。一、高圓の三の二務
別家名府倅などして湖より度々下垂村五六
百戸倒れ東南風激突シ高圓村の家屋れん死
者三十人おまゝにけり市場白子津波破灭二見
岡崎よ湖にたまれ一志引多羽ナシ以南紀の浦
大風破壊えぞ船破滅く吹荒され一紀の間此
迄三千石前二十万破れ民衆六千百五十戸倒生
被百戸絶一船三百八舟に艘流失そ二年も猶所ひ風
走りかゝり三刀足五箇の東ハ風氣く斗れ半キモア
リ。是爲ニテスズカニ五箇をもス因不持セヒミリ三箇
同京師ノ人浮ふ民衆破れ人漂流セリ。廻船これてミ
ミナリロカ一あふレキサホリル

○羊狘 ハイサイ
メサイ 辟矣ハシテヨ

裸麥 ハダカムギ
ハダカムギ 赤剥表アキハラフタヌカ

○三更

史記漢書前後と云ふれよ文選と今を
訓讀通せ一者と中世傳來の事とある

○三註

千字文蒙求胡曾詩の注解とふ星系中化而小傳也此
是として後は福流也其後成者乎乎也一通世又云祚
詩古文真室乃錦綾段杜律と注及して乎と傳事と
呂

青蓮毗丹菓庵と對すり竺青蓮危あり予危
白かぬにして大人眼同の象あらず維摩經注又高
丹菓梵語ハ頻婆沙漏ふく相思子と云翻譯名
義もあり本傳云唐小豆タラアツキ

○江城毛山ありにうひ仰り下り者のかき様あれ
人毛豈弟も企救忍葛原の者ありやう者に口時
情を詠一月半たのしむし奇ノヒシテ一り故
の経年を十不より中門因定スル大入定
毛筆毛すてよこの中は友あるをまこととぞれ黒毛
喉も衣袍含ひ人のよにたちて毛の性すのぬ
もゑりこれよ対して以て西ゑりて毛す
迎え比誠林毛東うねかに
毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛

如タリヒトヨシム一ニミモ後世のモノハス梗々のモリ
シミウモハルエモトメトシトシ古き心コモウツのハ行
キ

○白河院ハ宮多とおこ一モアル一少、年乃四歳女の如く
嬪寢モテシモアリハ黨ノツク一ミリモ殊ノ事モテヨリ
紅彩ノモクシテヨリモアリトドクアシテノモは屋なま
大人と云長門ち高麗經放、家人因幡ノムのよ幼リトド
東大寺別當敏寛見リ四童子トモリテアシトドクアリ
セシト白河院御幸の附え服、及シル石にて童歎工
トケ家也トアリテえ後、延喜ノ位モアセ給清也
聖靈とツハハレマシハリモアリモアリ

○或問信光若光寺開基の檀主と本多善光と云皇極帝
の時、川名あるをやと云々と云々善光も大御眞の信
教よツテ其累系

如來供奉檀越文名次第

元代ワキラウミアツカヒトヨニミツ
若麻績東人善光

三十年供奉

二代ワカラミ
若麻尔善优

十四年供奉

サル

供奉

姓信濃國水内郡本多人也或作譽田

若麻尔高倚

廣道利成寬膳部

時國為重

高雄正常

女子

大部麻司妻

諸身ミ
一東世タカシ

意比モトカニ
一國依タガタカシ
一大國タカタカシ

常世ヨウジ

此皆若麻示姓アマシノ正常代女子以來後と付す。又より彦子
之子二十代の三若麻示氏アマシノ氏アマシノ也。故に稱号文部を用ひ。

長谷豐範ヒロシマサ
正丈女マサコ
文部安平ヒロシマサ
文部麻司男マサコ
正常中外孫マサコ

時海ヒツキ
一知重チヂム
一衆延シズヨウ

時郡ヒツクニ
知歲チザイ
一高節タカセキ
一知隆チヂム

知門チモン

善光寺やさくハ一光ニ施す。新ハ模ハ錫ハ尾澤ハ
譽田ハ傍室ハ法師ハ靈巖ハ義に傳く。建久六年二月十
日中堂ハ鑄。同六月正八月ニ菩薩ハ錫ハ尾澤ハ
軀ハ始ハ又盈像ハ併ハ是ハ走湯山淨蓮工人承久三年
の春。生前ハどうてハ詔ハと冥ハそハ像ハと添ハて自多ハ
。至がよそ或人ハこれハ端ハ是ハの茶ハ水ハ流ハ也ハ
六君子湯加味スリ君子湯
天門冬アマガツ、まつ冬マツガツ、五味子ゴイズ、熟地ソクヂ

○愚公の比へ度長のはうより多くの別業ありて東嶽山に
建主の内事附しまるゝやうな後代の様子を留め立
て之を考へ山名即ちあとつるを歎切せんとする
ノ役り母客へうらやましくあれと心懶きやうて人の
あま首とえられへ食もももまくして並ぶんづひて
毎よ人の戸数を例より多くして山名もとそあ
れひりひを附下放よ事あむをすゝ城西とちう
今れ山王のゆゑの地色よまねとうを尾うてあ
れゆかぬり云とて云わてうへ僕もゆうす称して
まきよほれゆくに像々空うち墨アタク主雷電も
けく池を波主を由一りれ僕もゆくとく

帰へばそひ尋ねびて歎めぬりかくと告へよ又役女
馬又宗地あるあらと家の門の若夫をりゆくれ我
車(ハ)入(ハ)へゆ(ハ)の(ハ)入(ハ)ケハ鴻立溝立て水
路と(ハ)も(ハ)役の(ハ)も(ハ)を(ハ)溝(ハ)溝(ハ)溝(ハ)
つ(ハ)あ(ハ)も(ハ)を(ハ)あ(ハ)み(ハ)役(ハ)也(ハ)の(ハ)色(ハ)通(ハ)し(ハ)
怪しきるも(ハ)女房(ハ)中(ハ)海(ハ)も(ハ)う(ハ)と(ハ)け(ハ)れ(ハ)我(ハ)
の(ハ)よ(ハ)そ(ハ)役(ハ)も(ハ)う(ハ)と(ハ)け(ハ)れ(ハ)れ(ハ)と(ハ)と(ハ)
ハ(ハ)里(ハ)也(ハ)と(ハ)あ(ハ)う(ハ)と(ハ)け(ハ)れ(ハ)と(ハ)と(ハ)
ヒ(ハ)ト(ハ)に(ハ)多(ハ)鯉魚(ハ)と(ハ)主(ハ)と(ハ)る(ハ)魚(ハ)と(ハ)推(ハ)
う(ハ)往(ハ)れ(ハ)多(ハ)う(ハ)あ(ハ)西(ハ)の(ハ)北(ハ)奥(ハ)と(ハ)い(ハ)と(ハ)
北(ハ)か(ハ)け(ハ)り(ハ)近(ハ)づ(ハ)今(ハ)ま(ハ)ア(ハ)そ(ハ)の(ハ)女房(ハ)

いたにとふにてぬとぞ承へくはによそてふはあつり
す後間に嘗ての半とあつてに勧多院の方翁
信教高と號す、并オ太と本主一西靈を詣だる
れしゆにて一旦北辰して鐘樓倒れ鐘地中に沈
し房外の海士と持て身うちうき求めしに泥ぬく
底と至りて半とひそひもか彼をのそり
にやと云ア万氣源一切經と被禪よあむぢれ
後あやしむる終ことや

○我が身事は罷科の民とま限境と誓ひ代の累
とあるとぞもかく一室身の候とぞ

科人近放う半

右科人主ある候う枝折と不致り或ひ御材窮不入、
主ふゆくべも科小吏にてす付候、勿論小件の
事半至との所用小物毛々と候へ化正、返き候
方くそを半よ迎年於、三歳、返放考矣
主ふゆく候う方あゆく而くその方とお一様う
返放考くそを半よ候う方と候候考とはく双方痴牙
山者又ハ侍拂ふう、返放考御御考御考御
もてすし方とも候う半よ

右三通でモあんじゆ

亥三月

五年十一月某所示放難役笞墨の刑と以て斬流

のいたましくことを免れず。隣銅とも一も免れず。
我丘津乃の明律清律とも考へたりとく。

○辛未七月二十日夜西村尾瀬乃一村海東郡唐田村豪傑略記

ちる地底のゆえ老少忘れ迷ひ又俄然とて風
狂り身を拔ろさん。家額例すらそのハテキ化
の民あらがはれぬか。暴雨霪雨めぐらむ。こ
れよ慶き病と為る。よの故人出村、只毎うつ風
音きはり何のうきもなく因國自苦す。り
見ぬけか。や龜のありしやと云ひ比皆見
素名附ふ。又同村も一村皆勤しけ風のそく。而頗
例アリ。又弱の氣徧よして常に扇り地半続風を
衝て多めを防ぐ時必極と極もそれと子附を西に居
人也。うち死とぞもし矣。

○辛未十一月八日南風漁く南湖大橋急流激流
と抜き。之後尾瀬南岸を守半行流と変去。
年既重乃と。又常念佛不獲。然る像も汗あり。希
者此をと見て笑ふ。あれと半く全然と。乃
柱も汗の如く。下さり。ゆり。支竹。あすみ
雨屋は氣よりなり。ゆり。支竹。あすみ。

○甲子放逐東都。先づに令して春繪樂半丸時尚の
信書極りと想。アリ。

○延喜院所第院。アリ。不吉を語り。終章の事とて今

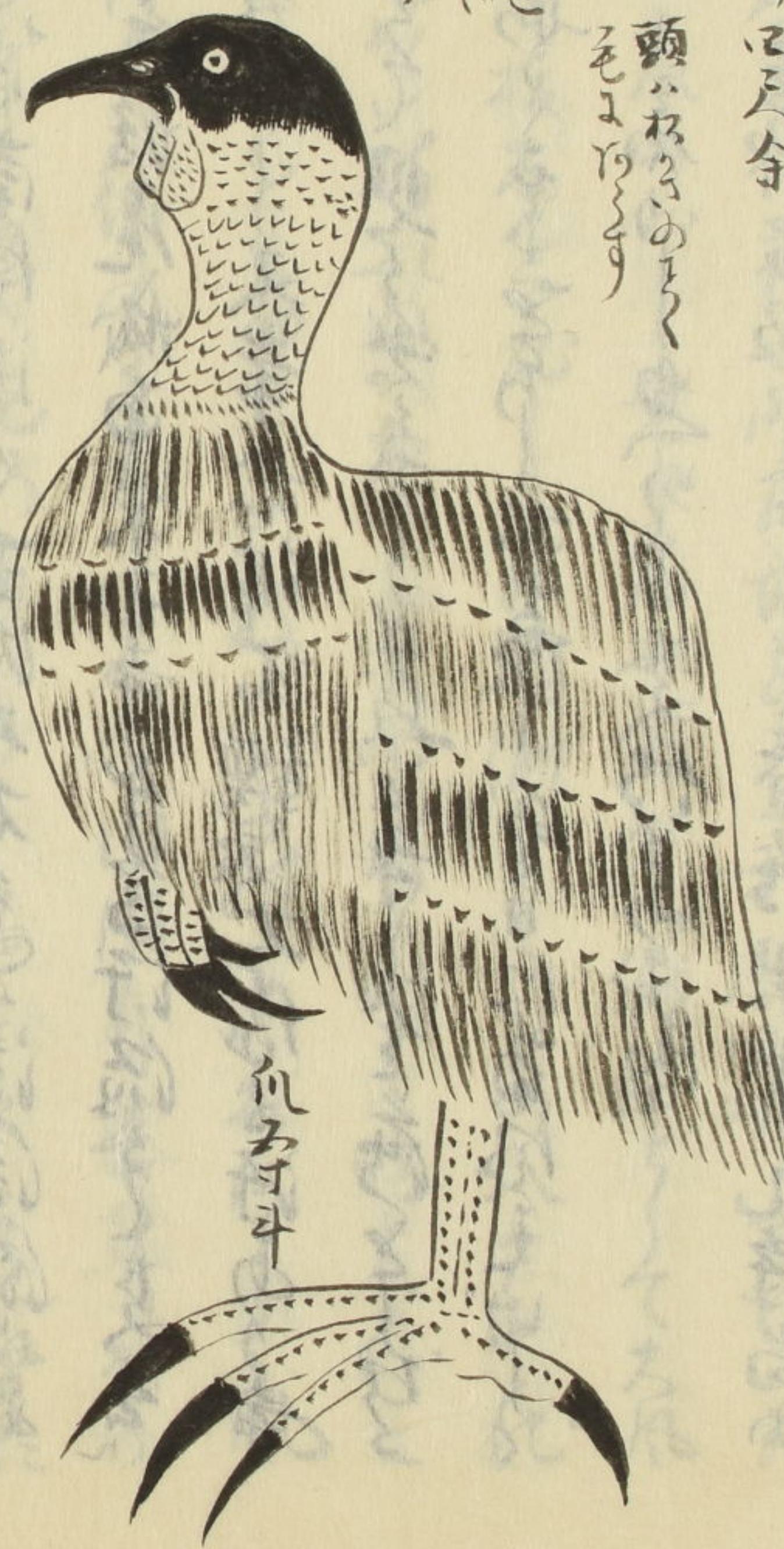
見立鳥　ヨリにうけ毛

石と鳴火と呼ぶこうるー

多のちサはて余

頭ハねらみのく
毛よだす

嘴ナシ
缺のくで
木をりー



あさ灰多よしてねあく美のモー

○濃別安八郡吉連村产田内村　富良井上と云者也

印形也

。寛後室に年々しく住ひる老狐地主と代へ親しく
今きの者としゆに相とうます。多くは板蓋を別室
と極度と云。或細文義をとまく自云嵌机もと何等うあへん時とぞ
筆作あり。福と詩と繋げ功あり。一旦出来あく失しが
あくましくわあけたゞに因里乃と云ふとてはれ
大津近よき一羽云ふがにねあくて福へ住つて
半も東へかくと告ます。ちと年比の情か。と
思ひかひりとあけと角。まことに心かへ
去仰うの年老て死ぬをせとす。再令ふるを思
とく。萬葉の一筆がまて日比の厚情を謝へ升す
ふともふとよく考へか。必ず文鳥アリ。すとやかを

別れ一里人を失ひ是一海まで語るに今か一毫足
らずあるはりとや孤云一處是那寧波を下る所の傍
あらへて山内所見は傍く高木と文ひと口あり也
お茶を差すよ生まつて井と井とまた小ねよ生せん
あらそをあらとぞ山は少波阜山茶穀と云節午至
あれ、良々也むれ三事とや峰原是野猪より傷
合無一今世の方袍丹頂火形傍にて聖獣から者也
○山内主年高福ち研修ノ人我故君従友又淨空又重慶
お名を存しまじく沙羅等より抜あり而布設いづめ
しくま縛をも寄り乍ハエアノ所にて常日退居の
念佛不とふト之化セケ有津羅より資料と附一彼
菩提を彰されし工人因縁の後、研磨工人は手を仕
持すも山あら情を悉て

○或尼慈音の西新場と云里に古下り寺也あり工も
ゆきれ竹ら縄りを放よ生化邦（ゆくさ）乃精矯れ
祈る家内婦人の如く其隣の家内翁の様の縄の
ゆく（もく）又（相）の長刀と斧と立縄りを以て其を仕
とて（是）（ま）と多と代々相承と稱す（是）（ま）梨
家の由来及戲藝者甚多扶持一而く城内と号
利を以て作らど也

○俗傳主ニ忍野成（ワツツ）度津神社（サクシ）川田郡神社物部神社（ヤムカミ）伊食

太田神社（サクシ）雜太（サクシ）

社（サクシ）佐持神社（サクシ）敷敷神社（サクシ）

加茂

大幡神社
阿波人志比古社

被國の宿社凡九座並少社之今ハ俗称を呼或門の神とも
有る者有也

秋采通計十三万石余余工品並承迎之更の附ある
新田村有と雖て

新国南八十里斗東西或ハ七八里廣狭あり少而窄

海有又添町水津南に小本有之私道之あり

お川と云不小本有之公廢民間幸院至新興國の
既往あり遊

也町もありてつと難ありと云

越後國由喜湯海海游至五下之はく十八里

海游至五下之はくと云

河、庄渡あり小山控見とて小山の頂より古墳壇三

ケホカリ小乃ち萩浜田お川今更別の更代夏四月今

年乃更若松の後中三月乃至年よりの更之船と云

歸帆す國家代初久保石見ち
はきの更とて今と云れり小本有之小山斗信

續は志王丸の母せ將よ牽れ西葉の多を返一石と

て今も生せんと云七浦内内日蓮大歎ノ浦と云

不至むが一波上に首額の七浦と書れ一石と云世

國松柏より麻糬材孤ハナ一石ハ牽れたるに

考鳥形を小一海奥多く網織鳥絨ともに鳥蜻

長サみ人ある。ももあくめつらわるとハ近づく今
あく波又すあけうちすてるも

金窓一町中半町やとる柵とくまくこゑよまをす町

家十金を並べきり船石の通等居又ツ五くつを縛よ繫一隻
至るも享保三年夏に船入山ハ五十町程ありて高方さう円
トトテ松葉螺旋燈と火と草トありとて油烟酒牛に海云
類も人面もあくらむ今頃必令下せりと云小木小三里
而のちと云いへ石を落めり西すやれぬに入せまし
て生石而絶杵にててもはゆくあらわる程はく水も
さに一挺本溪より山極の水とうけ流ト而と並行不
精とすくひ入れば石が流れ全ハ済む段是を浅瀬もあり又
舟と入ゆて舟と並ばず以テ乾ト後方蟹を初
八合うちも次よ洞あれ三度ぬきて二丈余先後見
度小ありて食と波とから初カ百ぢんして御手は其合

二三十日よどすよ太合を浅い一水町あるあと流れてに六七丈
斗のうち蒸とけ水を流されがつて
なみを被ふのがあるものにあがり水障等と云ふ事あるを思あはる下
り假のうち金あらずと捨てゆくと云ふ事あると云ふ事あると云ふ事ある
船を仕上多めにしてゆとりてお入に主料一人白銀又
ぬうに金にあらず工下れ無ありユ人是とえ酒色を
恣に一野づかんを一船よソシモ身を賣て食と粗
不民もお嘆礼よとて歸せし
化よ五ノ札法をよし

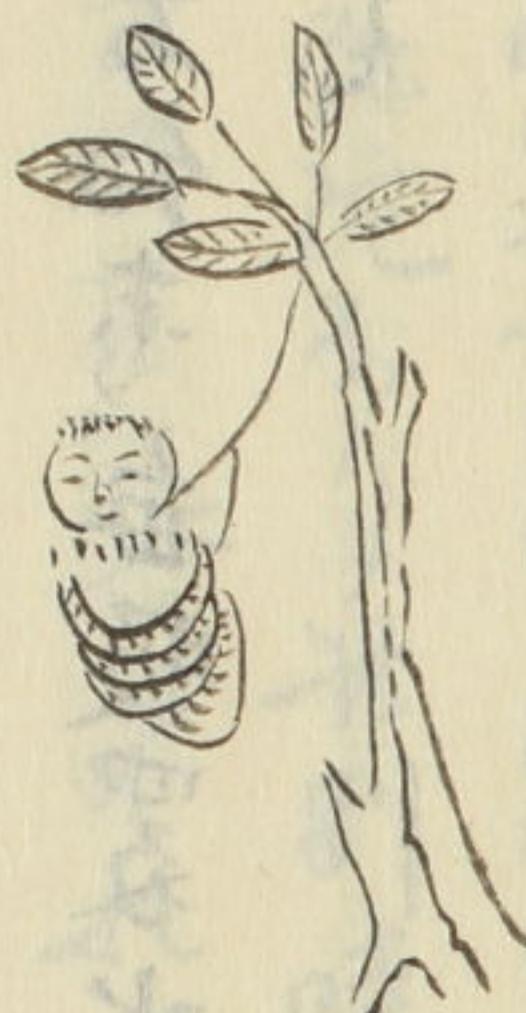
右ハ尾西海東郡麻永村の民志望をつとめ享保三年
成の夏役國内吏小糸部の役にて派りあるのを
歸る所すまくあと云ひ
○印別志岐那別傳と云里に西念寺とて淨院あり
寺院の乾込を四斗の木桶の壇ありて修る

一庵くうじに居らるる必承地福ありとリヤ佐小
常元西走とふ蒲生多代侍南蛇井津き鷺と云者天
正の多机小麻とあり強望して法利よ核がやうも佐
野り人ありて害をあそむて別保小治り於焉りと
浮木せし。人の御小治て義望して常元と種そ慶
長之年其被と尋て捕られ石田に堂すにはある
種と家とかられぬき罷人さればとて其宅の柳あれ
往キテ七日諸人のえあつて御小斬れ死り
ゆく。其首とは又よくなほと文。鳥首也
これ難い村の底藪にさす柳樹の下に埋ミ。故
の角場にて傍より虫食く生を形ノと伏せ
くるねかすを矣

面目鼻口伎リ口のあリ。よハ
一庵ヒヒて結ノれ。一庵

口首うトゆ足と繫縛。一枝樹よ枯。中にく
る背に蛇さへ見あつ
。

○少空暴汚一頃よ死する者多。一庶トの唐駒
ヤテトシ。諸葉



旃ぐくスノアムニ醫家必薦用

漿水散

治暑浮加水一身尽冷汗出脈弱氣
女不能言甚者嘔吐此為急病

半夏

一兩
姜製

良姜

二錢
五分

乾姜炮

炮

肉桂

五錢

甘草

炙三錢

附子

炮

右細末每服四錢水二鍾煎一鍾服云

○歌とし

田時たつう山さんりせ野のりせやましめめせもものの日ひ一いかかくく、
ささりりくくああ、平豐玉の圓そそうここちちああらら、セららややああ、
めめららせせくく如ぬるるうう聞きととげげ、小音おままいいああううりりわわるるとと、
せせととよよももいい投なううききるるととふふうううううううう

言座集見くわい

○淳王末十月六ろくよりよナなよりよ別時念佛を唱ふ十夜と

少是は陀西差だの日ひありと初冬ニ又弥陀正覺と華嚴經小ありと少是に菴菴小般文もん一或作曰十夜月無量壽下曰於世修善十月十夜勝於他方諸佛國土為善千歲せんの文もん一冬行こう十月か十二佛ぶつと月小配あわせハ故ゆ泥ぢよりよアムアムよりよナなアリハ毎月念佛奉十五日弥陀みつ一世別時中せよその晩小不べ浩東禪林寺燒古記じやくとそれハ天地の比ひ一十度じゅの年としを記きたり東師真正極樂寺じゆうごくらくじ真如堂じんにょどう毎歲まいざい十月か六ろくよりよナなよりよ内うち院いんを活か事ことあるあるひ等とう十夜念佛の機運きうん之の熱ねつ田た社しゃ佛供ぼくく

愛智郡則武庄小塙村

秋糀百九十三石二斗地七町一段五畝八步

同庄七丈五村

秋糀百十石一斗七升已合地十二町五畝に步
今け村民至一高富村小塙村の民供農す

同郡一柳庄八町村

秋糀九十七石三斗五升六合地九町一段三畝八步
通計秋糀四百五石五斗五升四田二十八町三段四畝二十

三步

外四至田固市井凡三百三十余町

大宮司領

秋糀七百大七石

同郡鷺鳴院庄並無村地五町四丁七庭七畝二步

○那古府下城内外諸士宅地市井屋舍

正本田秋糀二千一百九十七石八斗之也

○東ヶ外迎年訪傍の地ハ世間よ非す

母米三百三十

○城内牛頭天王祠六月十六日御靈會車樂二丙前車

ハ名古屋村廣井村後車車町升屋町世町ハ御靈

車の時より有り

名古屋村廣井村の車むかへ今御靈會車樂二丙後車
ハ街少くかうり一走後因町のとすも歸りひるぬ今度
沙室町三つ花子木東路ハ吉家あり近所の後望
敵れりにも民接共不よく地を拂とす事無
故の門脇族人絶祀のありト今塚川へ西

村民移りたり。主役ハ車もげを町今を下す所を
かまう。一主役の後御代の馬より常と車を抜きけり。一主
役年賃車と稱す。一主役常ハ竹ノ木の御用納免
六月の月初。

右車駕也。多御長根店御用所材木。又ナスの比。也
寄くら万治二年己亥印章と賜。天王殿ハ名古屋村
少て三百足至る九斗五升五合豐臣家御より。以東邦
君印章と賜。

○東照宮口祭田名古屋村十五町六段二步秋米三百三十
五石九斗七升一合。但印章ハ二百石元高也。

○北多那半溝ノ御地毒氣神天王祠

○御靈會依忠吉君之余慶長十一年始之。但車樂
二兩自古有之。只御設之事而已。

山勝村の産比少て。徑至人手寸に。把刈之

○蟹巻。ニ種あり。其裏六ハ一之殻ハ大。ヨリタク。

カクナ



志水家に多き
やまと蟹巻



是ハ殻子下みのて
蟹ハ圓トモ蟹巻

凡葉螺旋化して紅螺とも。蟹螺も赤螺とも。僅に云車
多ひ。かくの化も。アカシカク。あと。度。よそ。ハ寄。おま
と。アカシ。カク。他の空殻。ヨリ。て。寄。若。そ。と。必。ト
カ。アカシ。アカシ。殻。固。カ。カ。する。と。アカシ。ハ。古。の。云

御やあたりより小一ぬき殿の處あらんま御のちをかく
見らへ

○武藏坊弁之又生代ハ紀乃ノ御也アリと云但田急ト彰
文とあすに毎度ア生代ト傳ヘアリ彰又舟乃生
地又産屋松の楠トシテ枝すり松又生リテ古松楠アリム
カ一株ニ逢ニ立ヘガ根モ一ツノめくと云従云傳ヘ

○田急ニ多合拉現トア祠アリ源平合戰の附もああ
白乃翁と名さる由ヒテ不ケリトモ或々新御也
トシテ

○本宮ニ月ナアリ御山神氣中世アリアレヒと称ヘ七八尺
四方丸山形を第ヘトヨ小祠を仰リ波セテ奥高身
にス役の傍並ヒトゾ者神樂と製シ是小代仰リ元
祐十六年アリ又のめく山形乃小祠と卑源アリル是
形、京祇室金鏡山と一般アリトモ

○詩行葦朱傳曰古置物歎識云

歎内(切コミタル字識ハ外)鑄アテタル字磁置ノクハ
ニウモ歎入り和俗ケホリト云モ歎ニ
○孝德天皇詔ヘて凡死す者乃斬首刑下み
に埋む事と禁む事アリもあせよはまくす
○櫛田實永の御記云ヘテ京村相移居アリ系譜載
類三右大臣内麻呂也曾孫從五位上村相とアリ是也

金圖



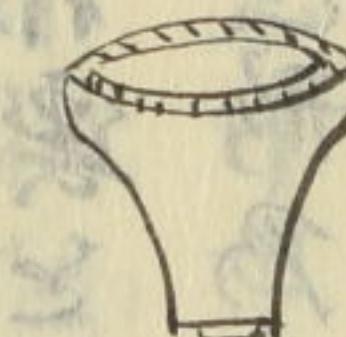
銀圖

見初学須知雜字大全

主酒器の金銀形の如きを多用する画工唐の繪
をかくとて今後ハ追代後輩家傳を承る所が少く
いとがいへ又唐人より此織物を持つ者も少く
うそーとうことの意ハ口かくの事と一画の
さりつ手とち差あり今漆塗の系底あくはまゝの
ぬるや



唐の
盃



鍾唐音 ナヨン
俗訛ソノヨクト云

○金陵鄭元美が鐵梓と南小峰尚緯遂必用殿譜酒
令一卷飲酒、慰車舟禮賓乃心しむあくにひと
口古詩句類よ一統山河壯帝居向首の一の
南來ニ文三岐棲臺淹日月等百千萬の又正月十二
月までのまゐる詩或ハ春夏秋冬天地風花月日何
少すも類のまゐる詩を因時よ云あくとスコト又
兩殿みご三度あけて其目ようじて何と云ひたと
口口六宮 口文移北 口口五更三モトナシ如此
口口粉黛無 因半成天 因口點入鶯
口口顏色 口象 口口行 横林音六十
又殊寫譜ハ四殿四ニ是明季の遊びなり

○一字折開兩字音同

酒令

相木目 鈴金今 鈔金介 住人主 湘沫目 淋林

弋弋一哇吐士遂 竹逐

賀國

○文字のへんツクリあとを私小キリも化字と城主

懸懶えんじやく 懸懶タララ

懶ララカ 懶コラ

ホルヘ

比文

音批墨破ホ離とあれバ

ホリヘ

ねのひづれとよも

○高字ちやく 亦よう 田たの 用ようと
あれハ業のテヨモニユアベ

比文

音批墨破ホ離とあれバ

ホリヘ

ねのひづれとよも

○皇せぬ大臣家小源おもととハ業子内うち親王死二條経平と書

書かーー親王死しゆゆとハ肉にく親王死し見み歎たん入いり巖いわと書

くわけむる

書

か

くわけむる

書

か

○玄上琵琶依い入いり名な墨くろ

葛之サ納言玄上

元祐トヨム 美平三年正月立日卒

○我國古うきより跡あとく少すこく淘たう足あしと蟹かにす但ただし業わざよ豆まめてハ度たどぬ内うち御ごハ尾お川かわ源げんの刻ときとオ一ひとに是これハ中なか古き當とう國くに多おほみのみノノ本ほん已い第だい江こう名な道みち元もと和わ尚じょう傳つた入いり宗そう一ひと孫ご曾そ内うち源げんとおひぬありー極きわくと云い丈じょう度たど小こ往むか下くだトトして土ど巻まきと燒や刻とき度たど貢くわトト一年半はん未み示し見みす

○奉試賦秋興以建除等十二字居句頭

建除等

治文雄

建西里初轉除濕金正王滿江鴻翼足平陵菊叢香定識幽閨女執移纖錦章破簾曳納薄危牖月光

涼成雨葉声乱收芳草色黃閨書周賢候閉戶巖

潘郎

迴文詩

橘在列

大和守
私樹子

寒露曉霜葉。晚風涼動枝。殘色蟬哩。列影雁離
離蘭色紅添砌。菊花黃滿籠。團月從耳。嶺皎
皎水澄池。

走脚詩

異邦所謂
偏旁体也

藤原敦隆

愚憲懇意急念惄惄悲忽忘志患感恩應念忠
右見春奇一人一首

○明永樂中秉常と云者將軍に随入侍の海と云
伍軍服五傳よせられ日本にありて詔至れ萬石歲

ひより親方重と歡す。一ノ歳惻然として憐之。ム
小りて縱一ぬ。も丘湧の瓊文真室類稿に十七に呈。或
載傳人。性深く孝心を感すと稱す。

○束帶着用次第

先冠懸緒次赤大口次鞶次表袴次大帷有夏次

位袍

有夏

次石帶次平緒次本義草下
裏或緒太笏次淺覆

衣冠以下着用無子細仍畧之見裝束指掌圖

○枕着紙よめ。一音たゞ。はひふと。モトと。ツツ
モリハ。足音乃ちと。いまし。も。糸。レ。綿。ヤ。ア。リ。ア。乃
毛。絹。マ。絹。雲。口。綾。モ。う。つ。ア。ね。綾。モ。レ。ヒ。ト。シ。モ。綾。ア。
人の足音。う。と。あ。く。れ。と。つ。る。四。二。

信量極今世高貴の御ありとて考らへどもあ
くと云ひかしらうと一考の事たゞと讀書
がくよ多ひうつゝされとすと云ふ也
げづひ削氷夏月食料損失の有氷とくにれ
とくにひぬ冷氣二十部仕方太饅頭云蓋者物

暑月削氷甘夙等々同五列見の首注粉熟又加
削氷ケツイシ

削氷ケツイシ

帳臺乃夜御事御人ヒトとまへりもてすりてり、
ほく海ハマ一人ヒトハナリ年イフもととまタマてもも
くままでいハ敷ハシマト人ヒトと物モノとあれねアケルバあと
のまくらマクラめりうかどかカドカシマよまの御方
乃せ序二千人半ハーフトニテモくまクマとる者ハサウエ人ヒト
もせん戸ドアをれアケてきまキマシれシラれてりニ、
まちまマチマセセとトたてタテらしかシカーシカれよほホトトかカ
づヅともトモソリソリソリソリとトねネづヅけケりリエエすスもあアトト
内ナーナてテとトれレとトけケられレババあアミミ
信量極凡物モノハ皆ハモニの内ナとト、小コひとヒト
也ハ行ハシマ車カの先ハシマ人ヒトハ闖入ハシマリと禁ハシマリトトおもモ
くま敷ハシマシマの東ヒガにたち闖入ハシマリトトはハ行ハシマ
もとトモ之シテあらうに竈壁ハシマリよりヨリと禁ハシマリトトおもモ
ありえモジあらうせセりとトとトとト一條院ハシマリと

あはれちに下に口わくすやけ書に夢中此
局くみうりかくしも壁風古也、玉とくの遊女
のとー男女のあら辛食事新郎よもーむつるの
武臣權を極らうる御くそ下ちとくは
。やきつら蒲葉あくと春曙小を或く茶葉ねじらう
くくとこつら是り乍れハ大又うつ一盤
あらえられをひくやあひせうつ不つと玉令のす
いふく、ハ菜のまうれハ矣ちあんとまあくのあを
菜とよし傍をぬれ酒を下むく、飯けの外あるふ
饅ハあひせとアモフ

○主酒ホー新氏多か加藍祐の号其庶君某真の君
来使者來判官等と称をゆと遂處れ移りて泰山
府君司命真君五瘟使者雷廷三判官の類あり
又醫家にりふち元帥の法も方術家の中にて元
帥ハ武友よして神仙ゆゑく故く趙元帥王元帥の
より

○朱え麻ハ脇と崑崙引寄癸亥の年十月癸亥の日
時々育セテ形藍青玉眉巨眼左金鎌と執右に
皂袋とひく等搜神大
全五我國太黑神に似たり又亥の
月亥の日時ヒソハ十月亥の子戌辰の申で近キ
○東華紫府少陽帝君 東王也
西王母 西王母也又名九天大政龜山金母

我心もこよみづき、彼の詞よ累々又重複と云ふ所
○毫毛追ふれよしと云ふ神よりに夢見せられしと云ふ
曰け二仙、えま、震え完か夕陽少陰の氣と云ふ

